

「誰もが活躍し、友だちと運動する楽しさを味わうことができる体育科授業の工夫—成功体験を繰り返して自己有用感を高め、互いに認め合うことができる活動の工夫—」

三豊市立比地小学校
教諭 宗田 活季

1 はじめに

本学級の3年生は、自尊感情が低い児童が多く、4月当初、「どうせ自分にはできない。」「自信がない。」「なんで、自分だけ。」といった発言が多く見られた。そのためか、他人の言動には非常に敏感であり、発言の揚げ足を取ったり、失敗などについて厳しく非難したりするなど学級内のもめごとが多くあった。

また、特別支援学級(肢体不自由)に在籍している児童が1名おり、体育の時間は本学級と交流している。運動量の多い活動は一緒に活動できないことが多いため、児童同士のかかわりも少なかった。特に、ボール運動に関しては、本児童と同じチームになると自分のチームが勝てなくなることが多く、そのことに強い不満を抱く児童もいた。本児童は、体を動かすことは好きであるが、体育には苦手意識をもっており、実践前の調査では、本児童一人だけが、体育やボール運動が「嫌い」として回答した。

そこで、本児童に、体を動かす楽しさだけでなく、友だちと協力して練習してゲームに臨み、達成感や充実感を味わわせたい、他の児童にとっても、一人ひとりの違いやよさを認め、本物の「チームワーク」の心を育てたいと考え本実践を行った。

2 実践の内容・方法

(1) 運動の特性と児童の実態に応じたルールの工夫

本実践では、運動領域「ゲーム及びボール運動」の中から、陣取りゴール型ゲームである「フラッグフットボール」を簡易化したゲームに取り組んだ。フラッグフットボールでは、ボールを投げる、受けるといった技能を使うこともあるが、ボールを持って走ることができるため児童にとってはボール操作が容易であり、学習前の技能差が小さい。また、攻守が明確に分かれているため、状況を把握しやすく、運動が苦手な児童にとっても自分の役割に集中しやすい。さらに、作戦の成否がはっきりと分かるため、話し合いや練習の中で、修正したり再チャレンジしたりする機会が保障されている。このようなフラッグフットボールの特性は、先に述べた、本学級の児童の実態に合うものであった。

本実践では、身に付けさせたい技能、思考力、態度を以下のように設定した。

技能	<ul style="list-style-type: none">・ フラッグを取られないスペースを見つけて移動する。・ ボールを持って、ゴールに向かって走る。・ 味方にボールを手渡したり受け取ったりする。
思考力	<ul style="list-style-type: none">・ 手渡しパスや相手を引き付ける動きによってDFが動き、スペースがで

	きることが分かり簡単な作戦を立てることができる。 ・ ゲームの勝ち方が分かる。(ボールを持った人をタッチダウンさせる。)
態度	・ 勝敗を受け入れたり、審判の判定を尊重したりする。 ・ 自分や友だちのよさに目を向け、励ましたりアドバイスし合ったりする。

(2) 単元計画の工夫

中学年になって間もない時期の実践であったため、運動の経験を保障するために、単元前半には、「しっぽとりおに」などのおに遊びや、「ボール運びおに」など、低学年時の運動を多く取り入れた。「ボール運びおに」で、攻撃側一人ひとりがボールを持って走ったり、ディフェンスが引き付けられて空いたスペースを狙ったりする経験を十分にさせた後、「ボールが一つになったら、どうしたら得点できるかな。」と問いかけ、「パス」や「相手を引き付ける動き」を引き出し、単元後半のメインゲームにつないでいくようにした。



【しっぽとりおに】



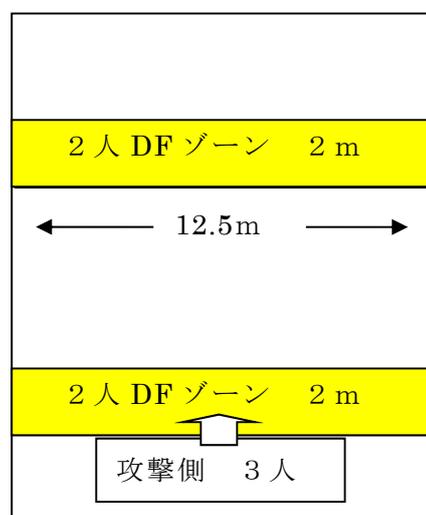
【ボール運びおに】

(3) より多くの成功体験を生むための「人数」「コート」の工夫

ボール運動では、運動の魅力である「得点」の機会を増やし、その喜びを児童に十分に味わわせることが大切である。そこで、メインゲームでは、3人対(2人×2)の攻撃側が有利な人数設定を行い、ボールを持たない者が相手を引き付けやすくしてボール保持者のスペースを確保することにつなぐようにした。相手を引き付けたり、ディフェンスのいないスペースを見つけて走り抜けたりするためには、コートに十分な横幅の確保が必要である。そこで、コートは、横に12.5m取り、縦には、2mの幅のディフェンスゾーンを2か所設定した。ディフェンスゾーンを2mに限定することで、相手を引き付けてできたスペースに走り込めばほぼ確実に得点できるようにし、本単元の技能面での狙いである「相手を引き付ける動き」が焦点化されるようにした。相手をかわして走り抜けた後、追い付かれてフラッグを取られることをなくすことにもなり、走るのが苦手な児童や、肢体不自由学級在籍の児童の得点を保障することもできた。さらに、チームのための戦術的な動きに加えて、「自分が得点できた。」という達成感も大切にしたい。



【攻撃側に有利な人数設定】



【メインゲームコート図】

いと考え、ボールを持たない者がタッチダウンした際にも得点が与えられるようにルールを工夫した。肢体不自由学級在籍の児童は、ボールを持ってタッチダウンを狙うことはできにくいと考えられるが、味方の動きによってできた空いたスペースを狙い、ディフェンスゾーンを走り抜けるだけで得点できるため、チームの一員として活躍できると考えた。

(4) ブロックなしルール

フラッグフットボールは接触が禁止されているものの、味方を走り抜けさせるためにディフェンスの進路を阻むプレーであるブロックをする際には、相手に接近することが多く、故意でなくても、接触が増えることが予想された。特に、肢体不自由学級在籍の児童は少しの接触でバランスを崩し転倒してしまうためブロックは大変危険である。また、相手の動きに合わせた切り返しなどの素早い動きが苦手であるために効果的なブロックの動きはできにくい。ブロックが難しい児童はチームの一員として活躍しにくいであろうと考え、本実践では、ブロックを用いないルールを採用した。

(5) ボールの工夫

ボール運動では、児童の発達段階や実態に合わせて用具を工夫し、児童にかかる負担を軽減することが必要である。そこで、本実践では、ジュニア用のライス型のボールの空気を2割程度抜いたものを使用した。小学生段階では、投げたり捕ったりしやすい球形のボールを使用することも考えられるが、本実践でのパスは手渡しパスだけにしたため、ボールの形状による影響は少なかったと考える。児童は、ライス型のボールに非常に興味をもっており、学習意欲を高めることにつながった。さらに、本単元で身に付けたい技能である、「ボールを持って走る」ことについて、ラグビーやアメリカンフットボール特有の「ボールを抱えて走る」動きにつながりやすいと考えた。

肢体不自由学級在籍の児童は、ボールを持って走ることはできるが、腕を自由には動かしにくいため、受け渡しの際に、ボールを落としてしまうことが多くあった。そこで、市販の洗濯ネットの中に新聞紙を詰めた特製ボールを用意した。このボールは柔らかく、軽いため、指を引っ掛けるだけで容易にボールを持つことができ、本児童にとって扱いやすかった。特製ボールは、複数用意し、どのチームでも使用できるようにした。運動の苦手な児童がいるチームが活用したり、作戦によってボールを変えたりする様子が見られた。



【ライス型ボール】



【洗濯ネットボール】

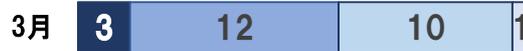
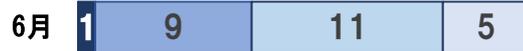
3 実践の成果

本実践は、肢体不自由学級在籍の児童だけでなく、運動を苦手と感じている児童を含め、すべての児童に活躍の機会が生まれるようにと願い行った。授業の振り返りの場面では、「〇〇さんがディフェンスを引き付けてくれたおかげで自分も得点をとれた。」「自分の動きによって相手を引き付けてチームの得点につながった。」など、

活動への参加意識や効力感が高まったことが感じられた。

すべての児童に得点の機会が保障されていたため、チームでの話し合いの際も、一部の運動の得意な児童だけが意見を述べるのではなく、全員が自分の意見を言える雰囲気話し合いが進み、運動の苦手な児童から、「楽しい」「うれしい」「できる」などの言葉が多く聞けたことが印象的だった。肢体不自由学級在籍の児童は、単元終末のフラッグフットボール大会でタッチダウンする際、ガッツポーズをしてラインを走り抜けた。他の運動が苦手な児童は、初めてタッチダウンできた際、涙を流して喜んでいて。チーム内にも、一人ひとりを生かして得点を取ろうという雰囲気が生まれ、単元終了後のアンケートでは、ボール運動や体育学習に対して前向きな回答が増えた。本校独自調査の、自己有用感のアンケート結果でもクラスの平均点が向上した。

自分は、クラスや学校の役に立っている。



左から4点、3点、2点、1点（グラフ内の数字は人）

【自分は、クラスや学校の役に立っている。
平均2.23ポイント→2.65ポイント】

自分には、いいところがある。



左から4点、3点、2点、1点（グラフ内の数字は人）

【自分には、いいところがある。
平均2.42ポイント→2.88ポイント】

4 課題及び今後の取り組みの方向

本実践だけで、学級の雰囲気や個々の自己有用感が向上したわけではない。年度当初から、さまざまな、自己有用感を高めるための活動を意図的に、継続して仕組んでいくことが重要であった。その中で、本学級の児童にとっては、一年間の早い段階で、「みんなに活躍できるチャンスがある。」「自分にもできることがある。」と実感できる活動に取り組めたことは大きな意味があったと考える。徐々に認め合う雰囲気が生まれ、学級全体として落ち着いて学校生活に取り組むことができるようになってきた。このような、運動が苦手な児童に焦点を当てた取り組みは、すべての児童にとって有効な支援になる。その考え方は、体育科だけではなく他の教科や活動で生かすことができる。

すべての児童が、自分や友だちのよさを認め、自分にはいいところがあると自信をもって言える、温かい人間関係づくりへの取り組みを今後も続けていきたい。



【試合前、円陣を組んで
気合を入れる児童】